

33 明治時代に発行された碩田医報

山之内 卯一

「碩田医報」は、明治十四年二月(二号)に発行され、明治十五年六月(十号)を以て廃刊となった大分県で初めての医学雑誌である。これまで二、三人の人の記述が見られるが、一号から十号を通覧しての紹介はなされていない。今回報告する理由である。

この「碩田医報」は、明治十四年一月、官許となり、大分町(現大分市)碩田医報社からの発行で、社主は荷揚町・佐野雋達、編集兼印刷人は宇西町・河野元振、印刷所は碩田橋東詰・成功堂(九号からは社主変更となり、官許明治十五年、社主は大分町・大城迪斎、編集兼印刷人は勢家町・河野元振、印刷所は同じ成功堂)となっている。執筆者は何れも大分県病院医学校のスタッフ医師達で、院長兼校長の鳥潟恒吉の論説を中心に編集が行われ、漢方を中心としたこれまでの地方医療を、新しい西洋医

学、医療に変えようとする意気込みが感じられる。発行の目的は、大意「県下の医療を行う者同志、近い人とは膝を接して親しく討論し、遠方の人とは通信によって討論を行い互いに切磋し、医道を隆盛ならしめよう」というものである。

定価一部九銭、一年分前金一割引、但し送料別である。このため、「医報」は通信社員と称する会員制で通信販売の形を取り、通信社員の募集を行っているが、創刊号は県下全員の医師に無料送付され、若し次号を必要としなければ三月十日までに送付停止の旨を連絡すると、連絡がなければ、購読の意思あるものと認め送付を続けるとある。

雑誌は、大きさ縦十八・四センチ、横十二・五センチ、ページ数三十七〜五十八ページ、表紙、本文ともに同じ紙質の白和紙で明朝活字縦組、一行二十五字詰、一ページ十二行、稀に表、図解があるが写真はない。

目次は、診断学、急性病論、薬物試験、治験記事、質疑応答、外報抄訳で、九号には魚住以作の脚氣論が付け加わる。何れも開業医向きの啓蒙誌の域を免れないもの

である。

診断学は鳥潟恒吉院長の巻頭論文で飾られ、毎回の連載、グットマン診断学を原本として解説がなされている。

急性病論は済生学舎卒の大橋純の連載執筆、ブラウ急性病論を原本とし、一、人事不省を発する諸症、二、瘧、三、窒息、四、呼吸促進、五、劇甚の胸痛、六、劇甚の腹痛、七、暴瀉、八、頑固な便秘、九、尿閉、十、劇性出血、十一、凍傷及び火傷、十二、中毒の十二項目に分け解説が予定されていたが、途中廃刊となったため、第二項半ばで終わっている。

薬物試験は内務省八等試薬師（現在の薬剤師）五十川徹夫の筆になり、キニーネ、ヨードカリ、モルヒネ、サルチール酸、安息香酸を論じている。

治験記事は主に鳥潟の診療記事で、膀胱結石（手術報告と解説）、象皮腫（臨床講義）、胸膜炎（症例と剖検）、気管切開術（二症例）、卵巣水腫（穿刺術）、脚気病（病理解剖・鳥潟執刀）が報告されている。なお脚気については、魚住以作（東大明治十四年卒）による脚気病論が

九号から始まっている。

質疑応答は会員の質問に鳥潟が答えたもの。彼は東大卒業（明治十二年卒）間もない赴任のため臨床経験に乏しく、経験のないものは、はっきりと断りを言い、外国書と学生時代の講義を参考に答えている。参考にした外国書はチームセン内科各論である。質問は発疹チフス、ジフテリアについてである。外報抄訳は鳥潟が *Beim Med. Wochenschr.* の中から選んだ記事を紹介している。

その他、通信記事（別府・末綱琢磨・医話、大分・大橋純・病床日誌の書き方）、通信社員（会員）名簿が掲載されている。

「碩田医報」が十号で廃刊を迎えた理由については不明であるが、読者の支援不足と資金難とが考えられる。

（平松学園大分視能訓練士専門学校）